２００６年度　関西まちづくり賞表彰式及びプレゼンテーション

日時　２００６年4月２４日（火）１５：００～１７：００
場所　大阪市立大学　文化交流センター　大ホール（大阪駅前第２ビル　６Ｆ）

次第　開会
　挨拶　　日本都市計画学会関西支部長　　鳴海　邦碩
　表彰　　鳴海支部長・小浦委員長
　記念撮影
　講評　　関西まちづくり賞選考委員長　　小浦　久子
　受賞プレゼンテーション
　2006 年度　関西まちづくり賞を振り返って（ミニシンポジウム）

関西まちづくり賞

浜甲子園さくら街(第１期建替）「タウンスケープをつくる団地再生デザイン」	＜兵庫県　西宮市＞
――	独立行政法人　都市再生機構西日本支社 株式会社　現代計画研究所　大阪事務所 株式会社　UR サポート 株式会社　昭和設計 株式会社　空間創研
レガッタによる兵庫運河の再生とまちづくり	＜兵庫県　神戸市＞
―	キャナルレガッタ神戸実行委員会 ・　浜山Ｃａｎ成る倶楽部 ・　和田岬はちのすクラブ ・　スポーツクラブめいしん ・　神戸市兵庫区まちづくり推進課
”人をつなぎまちを創るかなめ－「ＮＰＯ花と観音の里」のＴＭＯ活動”	＜滋賀県　高月町＞
	特定非営利活動法人　花と観音の里

支部長あいさつ

新しい試みのミニシンポ風景

受賞風景

まちづくり賞関係者

関西まちづくり賞
兵庫運河再生など3件

社団法人日本都市計画学会関西支部（大阪市）は十七日、二〇〇六年度の「関西まちづくり賞」を発表した。浜甲子園さくら街の団地再生デザイン（西宮市）＝都市再生機構西日本支社など五社▽レガッタによる兵庫運河の再生とまちづくり（兵庫区）＝キャナルレガッタ神戸実行委員会▽「NPO花と観音の里」のTMO活動（滋賀県高月町）―の三件を選んだ。

浜甲子園さくら街では大規模団地の建て替えにあたり、外に閉じたデザインになりがちな街並みに開放的な空間を採用。新たな団地再生プランを提案した。キャナルレガッタ神戸実行委は、兵庫運河でボートをこぎたいという思いを原点にしたコミュニティーの形成が高く評価された。

（永田憲亮）

2007.4.18　神戸新聞

関西まちづくり賞に
都市機構西日本ら

日本都市計画学会関西支部は、「06年度関西まちづくり賞」の受賞作品として、都市再生機構西日本支社の浜甲子園団地第1期建替事業（浜甲子園さくら街）における「タウンスケープをつくる団地再生デザイン」など3件を選んだ。

24日午後3時から大阪市立大学文化交流センター大ホール（大阪駅前第2ビル6階）で授与式とプレゼンテーションが行われる。

同学会が1998年に設けた「関西まちづくり賞」は、関西のまちづくりおよび都市計画分野で顕著な貢献をしたものや、画期的な成果・実績が認められたものを表彰するもの。9回目となる06年度は、昨年9月15日から10月31日に募集を行い、9件の応募・推薦があった。その後、大阪大学大学院の小浦久子氏が委員長を務める選考委員会が取り組み方法や発想、技術などの観点から評価し、3件の受賞者を決めた。

受賞者は次の通り。

▽「浜甲子園さくら街（第1期建替）（タウンスケープをつくる団地再生デザイン）」（兵庫県西宮市）＝都市再生機構西日本支社、現代計画研究所大阪事務所、URサポート、昭和設計、空間創研

▽「レガッタによる兵庫運河の再生とまちづくり」（神戸市兵庫区）＝キャナルレガッタ神戸実行委員会

▽「人をつなぎまちを切りかなめ―「NPO花と観音の里」のTMO活動」（滋賀県高月町）＝NPO法人花と観音の里

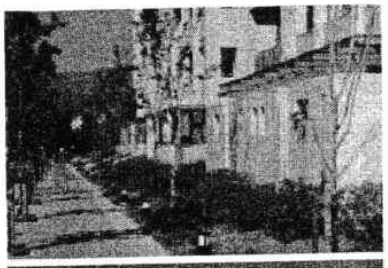
2007.4.20　日刊建設工業新聞

都市機構西日本

浜甲子園さくら街

「タウンスケープをつくる団地再生デザイン」

06年度 関西まちづくり賞 受賞



浜甲子園さくら街のまちなみ

24日に授賞式

都市再生機構西日本支社の浜甲子園さくら街（第一期建替）「タウンスケープをつくる団地再生デザイン」が、日本都市計画学会関西支部主催の「二〇〇六年度関西まちづくり賞」を受賞した。

同賞は、関西のまちづくりや都市計画の分野で貢献、また特色のある画期的な成果や実績を表彰することを目的に日本都市計画学会が一九九八年に創設したもので、今回が九回目。昨年九月十五日から十月三十一日に募集を行い、九件の応募・推薦を受け付け、同賞選考委員会による選考の結果、浜甲子園を含む三件が選定された。

中層スケールの街の表情づくり（既存の集合住宅の高さに近い五階の高さで上下を明確に分割し、小さく分節したユニットが建ち並びできるまちなみ）とする「タウンスケープをつくる団地再生デザイン」の説明は次の通り。▽中層棟上部、中層棟下部の色合いが自立つよう、上部は落ち着いた色を使用）▽中層棟・高層棟下部（明るいホワイト系を基調にユニット毎に色合いを変化）▽高層棟上部（青空に映える浮遊感のあるホワイトを使用）▽高層棟中間部（分節しながら全体を淡い色合いとし、圧迫感をやわらげ軽快さを表現）

選考では「周辺の状況と連続させ敷地を街区に分け、住棟の低層部を道路側でまちにひらくデザイン」とし「ときには低層部が店舗やカフェとなったり、高齢化に対応したデイケア施設が開設可能な空間が用意され、次世代のまちづくり型団地」と評価された。浜甲子園団地建替事業（第一期）（兵庫県西宮市古川町、枝川町）概要は、RC造六～十四階建て八七七戸、入居は十七年十月が六五八戸、二十年五月入居開始予定が二一九戸。受賞者は都市再生機構西日本支社、㈱現代計画研究所大阪事務所、㈱URサポート、㈱昭和設計、㈱空間創研。

授賞式およびプレゼンテーションは四月二十四日、大阪市立大学文化交流センター（大阪駅前第二ビル六階）で午後三時から行われる。

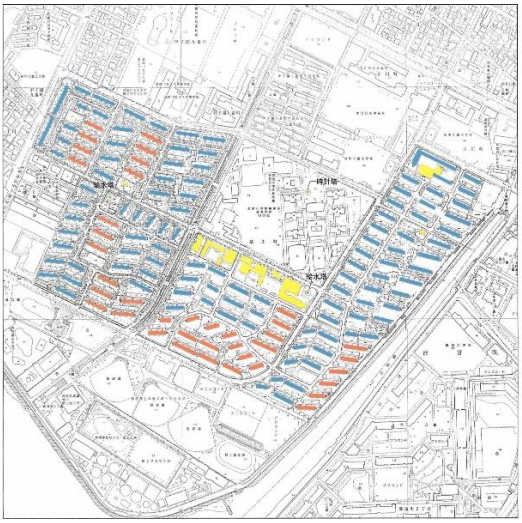
2007.2.23　建設新聞

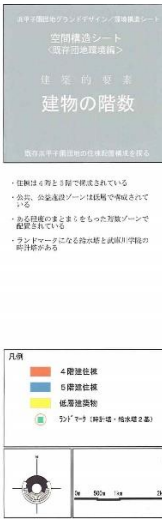
＜表彰対象の紹介＞

浜甲子園さくら街（第１期建替）「タウンスケープをつくる団地再生デザイン」

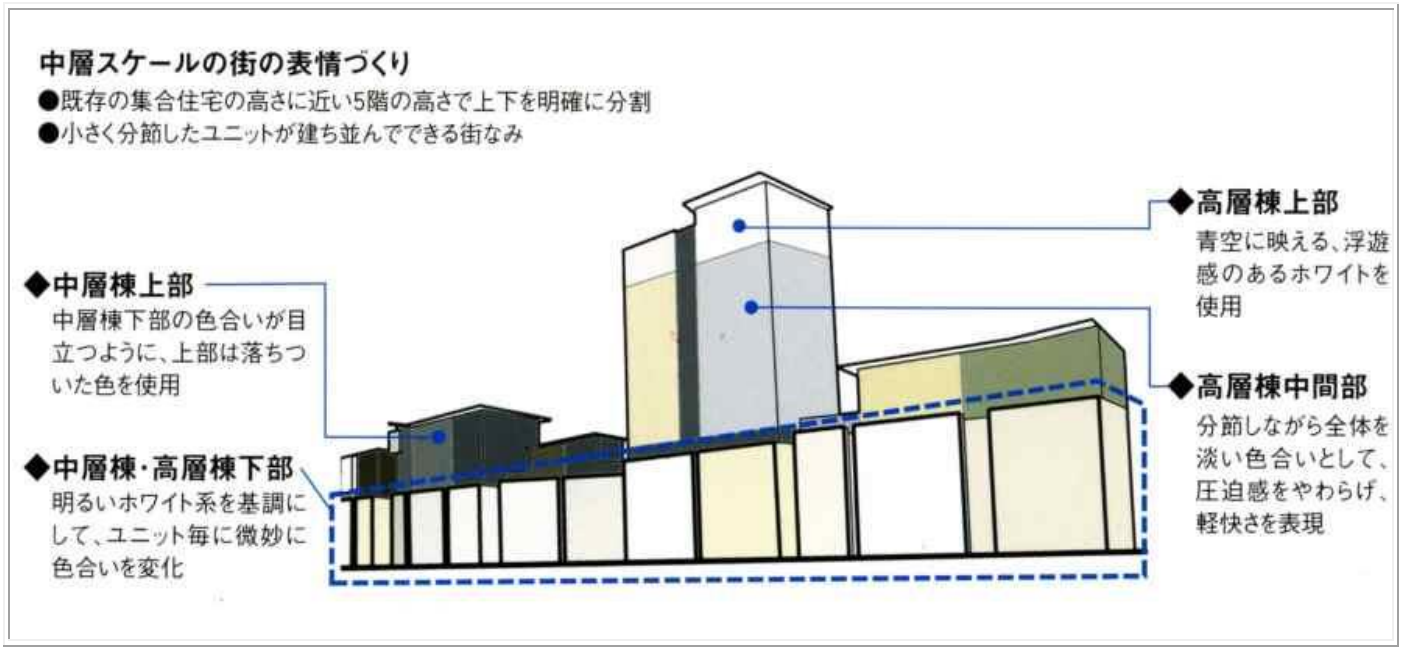
推薦者　関西大学教授　江川　直樹

浜甲子園団地は、阪神電鉄鳴尾駅と甲子園駅の南に位置する敷地面積 31 万㎡、150 棟、4,613 戸の住宅に約 1 万人が暮らす関西でも有数の大規模団地で、当時の日本住宅公団により昭和 37 年から 39 年にかけて 2 年程の短期間で建設され、都市部への急速な人口移動に伴う住宅不足解消に大きく貢献しました。





多くの人々に愛され、親しまれ、育まれてきた団地ですが、時の経過に伴い、建物が老朽化し、住宅の構成や設備なども、現代の生活水準に応え難くなり、平成７年度から建替再生の検討調査が開始されました。



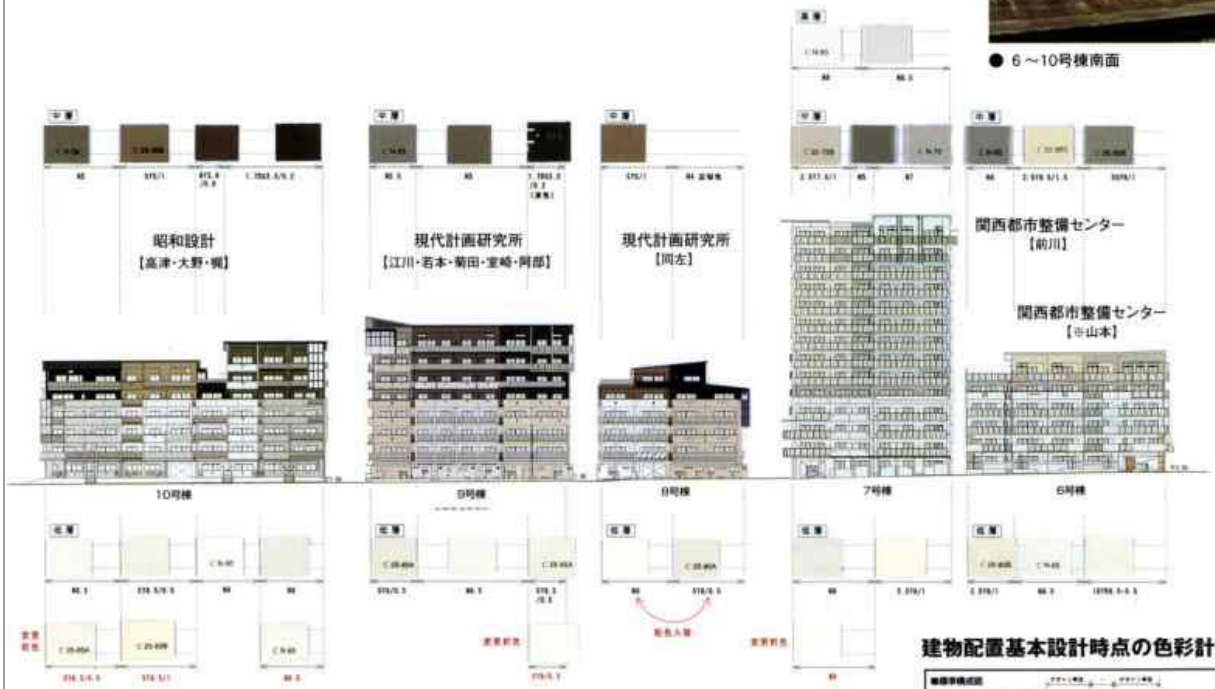
全体構想については、学識経験者からの提案や、行政の意見、指導を受け、検討を重ね、平成 13 年度に第Ⅰ期事業に着手しました。再生事業では、浜甲子園独特の雰囲気ある歴史を次代へ継承しつつ、郊外型の団地か

ら、都会的な多様性・機能性を備え、広く地域との一体感のある住宅市街地へと、新たなまちづくりを目指すために、特に、海に近いアーバンリゾート的な特徴を活かし、健康的な雰囲気を併せ持つ、気持ちの良い住宅市街地へと展開することが目標とされました。

近年の団地建て替えは、敷地をコンパクトに集約し、高密化して余剰地を生み出し、街としての必要施設や民間施設を誘導することが目標とされ、その結果、従来、中層だった集合住宅が一気に高層化し、既存住民の生活環境がガラッと変わってしまうだけでなく、周辺をも含む環境が一気に民間集合住宅（マンション）地のごとく変貌を遂げる例が多いのが通例です。特に建物で言えば、経済効率から容積率を目一杯つかった民間マンションと同様の高層板状住棟やタワー型高層住棟という形状になる例が多く、地域の公共的資産としての公共集合住宅という考えは、どんどん消滅していく流れにあると言えます。

6～10号棟 南立面図

● 6～10号棟南面



建物配置基本設計時点の色彩計画

13～16号棟 南街区受水槽 清掃員詰め所 南立面図

● 13～16号棟南面

※デザイン協力を行った景観アーキテクト

浜甲子園の建て替えでは、都市再生機構の事業としては他と同様のコスト制約を受けるものの、アーバンデザインの目標と、既存住民、今後入れ替わる新規住民にとっての「浜甲子園らしい居住環境」を創り出すべく、プロポーザルコンペによって新しい集住の形態を模索することとなりました。最初のプロポーザルコンペでは、全体基本計画の策定とマスターアーキテクトの選定が対象となり、基本計画確定後は、同じくプロポーザルコンペによって、ブロックアーキテクトが選定されました。

1-ナンキンハゼの並木道

2-中層・高層の複合景観

2-中層・高層の複合景観

3-はらっぱに通じる階段

2-中層・高層の複合景観

4-抜けのピロティ

6-ベンチと共同花壇

8-専用庭

8-専用庭

9-集会所

9-集会所

どちらかと言えば、ソフトなまちづくりが議論に上ることの多いこの頃ですが、生活環境を形成する骨格としてのハードなデザインにおいて、浜甲子園の街にふさわしい、大きすぎないボリュームの実現を目指し、高層棟を細い搭状のものとして中層棟と混在させ、浜甲子園の気持ちの良い、広い青空が感じられるようにしました。また、人々が行きかう道路レベルはできるだけ小さなスケール感を感じさせるように工夫し、特に１階の住戸には全て専用庭を設け、道路や中庭からも直接アクセスできるようにしています。

こういった配置は、経済の論理だけでは、なかなか実現できないものであり、戻り入居後１年が経過し、入居者や周辺からの高い評価も得られています。

事業主の都市再生機構サイドでも、建て替え団地の社会的意義に対する多くの関係者の熱い思いと長時間に渡る検討調整の数々が、このデザインの実現の背後には存在しており、関係者の粘り強い意欲がなければ決して実現できなかったものであります。

レガッタによる兵庫運河の再生とまちづくり

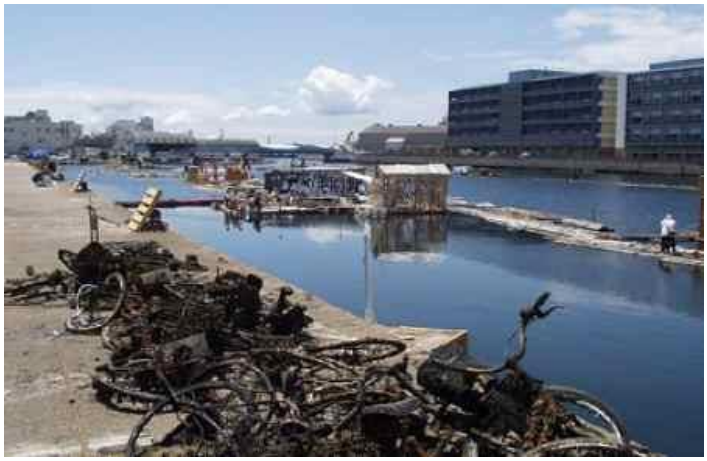
推薦者　(財)神戸市開発管理事業団　曽家　末晴

兵庫運河は、海難事故の多い和田岬沖を航行せずにすむようにと、２５年の歳月をかけて明治３２年に完成した日本最大級の運河である。近年、運河としての必要性は低下し、周辺の工場への船舶輸送や貯木場として使われてきていたが、今ではそれらの必要性も無くなった。また運河に点在する物揚げ場は、その機能から手摺の無い岸壁であるため、水難事故にあう子供も多く「危険な場所」として子供が近づく事は禁止されていた。加えて、プレジャーボートの不法係留の増加、ゴミの投棄や不法駐車など、周辺地域住民にとって「近寄り難い」場所となっていることが問題であった。

浜山レガッタコースの位置

こういった中で、運河の活性化が行政と地域の共通課題となり、平成１５年度に神戸市が、兵庫運河に関して広く市民から活性化提案の公募を行い、神戸市漕艇連盟（以下、市漕連という）の「兵庫運河を市民の親水空間として再生し、市民レガッタの開催と地域スポーツクラブを設立する提案」が入選した。

神戸市兵庫区役所は、その提案について地域の青年会から合意を得、市漕連と連携して実現に向け、区役所が取り組みの窓口となり、行政の内部調整を行う一方、地域住民にボートの周知・普及活動を始めた。



整備前の兵庫運河にはゴミの投棄が目立つ

レガッタコースが整備され見違えるような兵庫運河

提案の具体化に向けて、本物のボートを運河に浮かべての試乗会や親子ボート教室、小学生を対象としたエルゴメーター大会(トレーニング器具を用いた体験型ゲーム）、ボート競技が主題の映画「がんばっていきまっしょい」の上映会の開催などを行った。また、学生のボート部を呼び、運河での練習風景によりボートに対する関心を高めてもらう企画も実施した。

ボート体験をした地域の住民らは、ボートの楽しさと水面から見る風景のすばらしさに、あらためて地域財産としての兵庫運河を認識するようになった。

運河を管理する神戸市みなと総局も「みなと神戸－いきいきプラン」（平成１７年２月)の中で、運河の用途を産業から親水空間に転換を図る方針を打ち出し、スポーツの場と位置付けることで運河再生の方向が一気に加速され、長年の懸案であった運河に放置された貯木の撤去、岸壁への手摺の設置により、市民が安全に運河

に近寄ることができるように整備する事とした。そして平成１７年７月にその完成を記念するレガッタ大会の開催が決定された。

地域共通のキーワードであった「運河の活性化」に向けた準備への取り組みは、ほとんど全ての作業を地域の婦人会・自治会・ＰＴＡ・漁協・近隣企業など多くの地域団体のボランティアで対応し、大会で使用する艇は、各地の漕艇関係団体から老朽化した艇を譲り受け、海上自衛隊員らの協力も得て修理・再生し、大会の告知・資料作成・大会要綱作成から当日の会場設営等、地域ぐるみの活動として広がった。

兵庫運河で初のレガッタ大会は、平成１７年７月１６～１８日の３日間開催され、兵庫運河に多くの市民の注目を集め、運河でレガッタができた喜びを「運河の再生」として感じてもらえた。

大会後、近隣企業や学校等でもボート競技への意識が高まり、休日に小学生達のボート練習の声が響くようになり、地域に密着した組織作りや、レガッタ活動の底辺を広げて競技スタッフも含めたパートナーを増やし、さらに広範な市民の受け入れ体制が必要なことなどの課題も認識されることとなった。

第２回大会開催に向けた主な取り組みには以下のような特徴がある。

①　実行委員会が、広範に多くの競技団体等の協力を受け、相互のネットワークが　　拡がった。

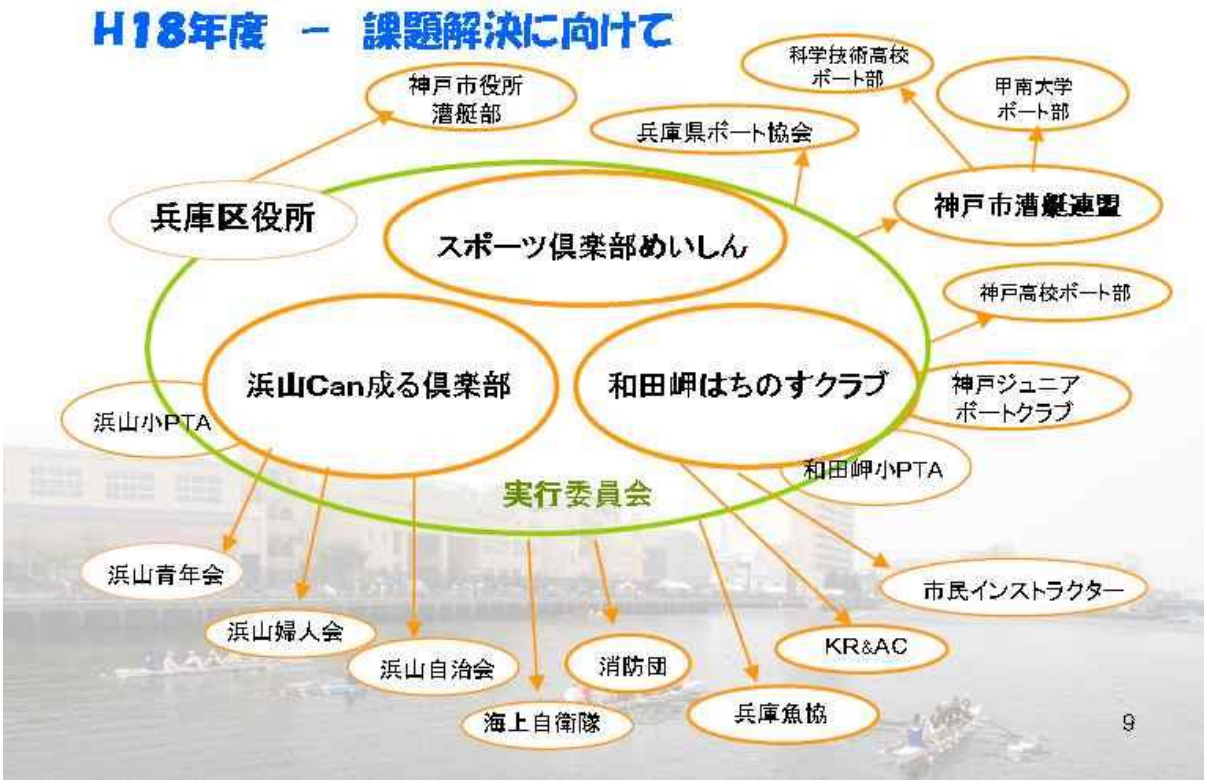
②　実行委員会を地域主体に運河を囲む３小学校区の総合型地域スポーツクラブとして構成し、参加者の拡がりを目指した。その結果、小学生の参加者が増え、親も含めた参加者の拡大につなげた。

③　初心者から競技者までの練習用の艇を確保し、初心者対応のクラブ（キャナルローイングクラブ）と競技者志向のクラブ（はちのすクラブ）を住み分け、幅広い層に対応した。

④　ボート部のある学校に練習場所を提供して相互協力を図り、市内高校ボート部が身近な場所で練習可能となり、彼らのレベルアップにつながったと同時に大会時のスタッフとして協力も得られた。

⑤　競技運営スタッフや市民インストラクターの確保に向けた活動を行ない、大会時や練習会において、高校・大学・社会人などのボート関係団体の応援に加え、当地で育った市民インストラクターによるスタッフの増員が図られた。

⑥　ホームページを作成し、広く情報発信したことで活動内容のＰＲが可能となり、市内外からの利用者や大会参加者が増加した。



「第２回兵庫キャナルレガッタ」は平成１８年８月に開催された。

地域団体で構成する実行委員会が主導し、複数の競技団体や多くのパートナーからスタッフとしての応援や協力を得、地元企業も空倉庫(約 350 ㎡)を艇庫として無償提供したり、倉庫の外壁に壁画を描く等の景観演出でも協力が得られた。大会は、これら多くの関係者や市民の協働と参画を得て大成功に終り、運河と地域活性化へのステップとなった。

今後、継続的に活動していくために、日常の練習のための市民インストラクターの養成や大会運営スタッフの充実などの更なるパートナー作り、大会開催経費の確保、など多くの課題も残されている。地域主体の活動に対して競技団体・行政の支援協力や維持しながら課題を克服していく取り組みが期待されている。

これら実行委員会の活動は、ボート関係者にも広く認知されることとなり、兵庫運河のコースが(社)日本ボート協会による日本初の短水路公認コースとしての認定が検討されている。

この活動は、運河の活性化策としてのレガッタ開催の提案をきっかけとして、地域が自ら組織を作り、民間レベルの競技団体や外部組織などの協力を得て活動を広げ、実行委員会・行政・競技団体がそれぞれの得意分野を分担することで「協働と参画」による地域の活性化を実現させたものである。

これまでの高齢者が中心のまちづくりから、今回は、今後の地域をになう若い世代が中心となって、ボート競技というスポーツ活動を楽しみながら、外部からの競技者などの受入れ体制を広げ、新たな来訪者は周辺へ賑わいを提供するなど、運河周辺の活性化に向けた地域団体による、地域を超えた活動として更に広がっている。

（キャナルレガッタ神戸のＨＰアドレス　http://www.kcc.zaq.ne.jp/canal/）

”人をつなぎまちを創るかなめ

―「ＮＰＯ花と観音の里」のＴＭＯ活動”

推薦者　地域計画建築研究所　松本　明

滋賀県伊香郡高月町は琵琶湖の湖北地域の中心地であり、農村地域の中に先端産業の日本電気ガラスの工場が立地し、農業機械のヤンマーの創業地でもあり、北陸自動車道や国道 8 号などの交通条件を生かした商業・流通・物流企業が立地している。

歴史的にも「北国街道」沿いのまちとして、また、国宝十一面観音をはじめとする様々な観音を擁する「観音の里」として歴史文化資源にもすぐれている。

平成 18 年 10 月に北陸本線の直流化が完了し、京阪神方面への直通新快速電車が開通し、人口 1 万人のまちとして、旧集落を含めた JR 高月駅周辺の新しい玄関口整備、景観の修景や保全、観音の里としての隣接町と連携した広域観光ネットワークの形成、町民の生活文化の向上など多くの課題をかかえながら、新たな変化が起こりつつある。

コスモスの花を咲かせるプロジェクト

花いっぱい運動

これらに対し、高月町と商工会を中心に、中心市街地の活性化を目指した「中心市街地活性化基本計画」や「地域振興ビジョン」を策定し、地域振興のまちづくりを進めてきたが、今日、重要となっているまちづくりにおける「企画調整機能」と「事業推進機構」の両方の機能を持った組織の立ち上げが急務であるとの観点から、この推進母体として、「NPO 花と観音の里」を平成 17 年 12 月に立ち上げ、18 年 3 月には知事による NPO 認証及び町長による旧中心市街地活性化法に基づく TMO 認証を受けた。

観音検定

「花と観音の里」の活動内容は、まちづくりを官民連携で進めることを基本に、NPO 花と観音の里を核として、町商工会、町役場、自治会、各種団体が連携して、高月駅周辺整備とあわせた中心市街地活性化計画の推進、自治会等による「美しい景観を育てる」協定書づくり、各種活性化イベントの企画・実施と盛り上げ、各種勉強会、「観音検定」の実施などに取組んでいる。

活動分野も、ボランティア、NPO、営利活動など多様に対応できるようになり、各組織の役割を大切にしながら、NPO が地域運営の中心的位置を担うようになった。また、中心市街地の活性化に向けた各種 TMO 事業の実施主体が明確となり、「住民組織」「各種団体」「民間企業、３セク等」の協働・連携もスムーズに行えるようになった。NPO の構成メンバーも、商工会、各種団体、自治会、行政など幅広い分野から参画を得ている。

さらに、活動拠点についても「サンレイバー」（町施設）の指定管理者となって施設の管理・運営を行い、この施設は各種の会議やイベント、勉強会の会場等、気軽に集える場として活用されている。

これまでの活動と今後の展開について、以下の点が特徴としてあげられる。

①　地域振興に役立つ活動内容

地域の自然や環境保全、景観づくり、祭やイベントなどの生活文化活動、各種の計画づくりや事業づくりの提案、調整、合意形成の活動、地域産業振興としての農産品加工による付加価値アップ、販売、観光交流などの連携に貢献している。

これらを地域振興に繋いでいくとともに、新しい試みとして観光振興と結ぶ「観音検定」の実施や、イベントの支援・参加、地域の美化対策としての花いっぱい運動など、地域住民と連携した「企画調整機能」の具体的実施は高く評価されている。

②　地域の運営・経営組織としての役割

従来は、財政面から行政が地域を動かす中心的な役割を果たしてきたが、地域の総力をあげた「地域力」を具体化、推進できる組織としての「NPO 花と観音の里」の新しい役割をあげることができる。

今後、町民の合意形成、ボランティア活動、生活文化活動や事業推進、経営体の活動の中軸として大きな役割を発揮することが期待される。

例えば、市町村合併などの動きに対しても地域主体の運営・経営組織として新しい役割を担う。また、全国の TMO の失敗例から学び「事業推進」だけでなく「企画調整」や各種実施主体とのネットワークにより、新し

い地域の管理・振興にとって貢献していくこと可能性を持つ。

③　中心市街地の活性化

今後、法改正に基づく新たな中心市街地活性化基本計画づくりにおいても、大きな役割を果たすことや、地域における人材育成の面でも大きく貢献することが期待できる。

また、NPO 単独の活動と共に、高月町や商工会、町内会などと連携した大きな力となりつつある。

「銀河鉄道の夜」公演企画